

様式 C-19 (記入例)

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2006～2009
課題番号：18500756
研究課題名 (和文) アメリカ生命倫理学の黎明期における歴史的・社会的背景についての包括的研究
研究課題名 (英文) A Comprehensive Research on the historical background of the era when the American Bioethics had acquired its institutional identities.
研究代表者
金森 修 (KANAMORI OSAMU)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90192541

研究成果の概要 (和文)：当初、「黎明期のアメリカ生命倫理学」の特徴を剔抉することを目指すことで始まったこの研究は、エンゲルハートとキャラハンの大著『倫理の基礎と、その科学との関係』の詳細な分析を遂行する形でその前半の山場を迎えた。その後、神学や哲学の因子が周辺化され、医療経済的思考が生命倫理内部で優勢になるという傾向を確認するにつれ、その歴史をそのまま追跡しても思想的には若干二次的な興味しか引かないという判断に到達した。よって、その後若干研究方向を修正し、生命倫理学史そのものではなく、生命倫理学の周辺で作動する生命概念の追跡を開始した。そして、現代の生命論で興味深い意味をもつ概念対、「ビオスとゾーエー」に逢着し、その思想的・生命論的含意を掘り下げることのために研究期間の後半部分を費やすことになったのである。

研究成果の概要 (英文)：In the first phase of this research, I wanted to identify the major characteristic of the “first period of the American bioethics”. To achieve this work, I read carefully the following 4 books. Tristram Engelhardt and Daniel Callahan eds., *The Foundations of Ethics and Its Relationship to Science* (1976-1980). But after this work, I was obliged to change the direction of the research, because of the relative lack of interest, in terms of the history of thought, of the further development of the American bioethics. The American bioethics became more and more closely related to the economical concern, and the scholars specialised in theology and philosophy in this domain were little by little marginalized by the participants who worked more closely in the domains such as economics, statistics, and even theory of management and business science. So, in the second phase of this research, I made an effort to find more philosophically interesting concepts upon the bioethics, or the theory of life. During this second research, fortunately I could find a really interesting couple of concept, that is, the couple of Bios and Zoe. Drawing on especially the works of Italian thinker Giorgio Agamben, I tried to elaborate a theory of Bios and Zoe, taking concrete examples from the medical ethics and medical history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,500,000	750,000	4,250,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史
キーワード：生命倫理

科学社会学・科学技術史

1. 研究開始当初の背景

(1) アメリカの生命倫理学は、現代の先端医療がもたらす社会的・文化的・哲学的な問題に対応して1960年代終盤にその概念的・精度的基盤を整えて以来、重要な社会的役割を果たしてきている。私は、その頃から90年代初頭くらいに至るまでのアメリカ生命倫理学の歴史を本研究が開始される2006年以前の数年間調査してきており、その中で、実際の展開が始める以前の制度的成立期前後でのアメリカの状態はどのようなものだったのかを知りたいと考えた。そのために、「アメリカ生命倫理学の黎明期」という特化した研究をしようと目論んだ。

(2) ただ、或る意味で当然ながら、アメリカ生命倫理学といっても、それは本来学際的なものなので、他の分野の学問とも多様な錯綜を示している。だから、この研究にはもともと浮動的な特徴があり、実際に研究を開始してみないと、どのようになるかが私自身よく分からないというところがあった。そして、後述するが、結果的にはこの研究期間全体で見れば、当初の目的とはかなり異なった方向に研究が展開することになった。

2. 研究の目的

(1) まず60年代終盤から70年代前半にかけての生命倫理学黎明期・成立期でのアメリカの文化的状況を可能な限り広範な分野に目配りをしながら浮かび上がらせるという必要があった。これは事実上、一種包括的な文化史的研究であった。

(2) そして、その文化史的研究と並行しながら、70年代後半にライク編『生命倫理学百科事典』と、ピーチャム&チルドレスの『生命医学倫理』へと結実するに至る生命倫理学の胎動へと徐々に研究領域を狭めていった。ただ、研究が始まった一年半ほどたったその頃から、この時期の生命倫理学は、内在的思想としてはまだまだ未熟な感、試行錯誤感を否めず、少し軌道修正をして、より豊かな題材へとシフトすべきではないか、と考えるようになった。

(3) その結果、大枠で言うなら、生命倫理と生命論、生命への政治的介入というような問題全般に関する一種の概念論的分析に集中するようになり、それは事実上、「黎明期の生命倫理学」に特化した研究をするという当初の

目的からは拡大的移行を示すものになった。

3. 研究の方法

(1) 基本的には文献学的研究に終始する。まず、上記のような一般的な文化史的研究（アメリカの60年代～80年代初頭）。

次に、生命倫理学の百科事典と、その後、生命倫理の基本原則と見なされるものを提示した古典的文献、『生命医学倫理』へと至る基盤的研究、より具体的には当時のヘイスティングス・センターのレポート、並びに同センターが公刊する研究書群のサーヴェイをする。

(2) ただ、上記のようにそれを行う過程で、「黎明期生命倫理学」というような枠組みでは捉えきれない問題群が奔出し、それへの対応のために、視座を広げ、政治哲学的なもの系統的調査もするようになった。生命倫理と生・政治学との中間領域の踏査というスタイルを取るようになった。

4. 研究成果

(1) まず当初の研究計画に最も直結する文献群として、共に生命倫理学黎明期の立役者であるエンゲルハートとキャラハンが二人で編集した浩瀚な四巻本、『倫理の基礎と、その科学との関係』を詳細に分析した。それは、題名からも分かるように、同時代の科学的進歩に対応して、従来の古典的倫理学者が、自分の専門から出て科学に対応的な倫理を造るべきだという基本的問題意識のもとに構想された議論である。その意味では、生命倫理学の黎明期に相応しい巨大な業績である。しかし、相当期待して読んで見たが、実際には、まだ模索的性格が強すぎるということが分かった。神学者、倫理学者、哲学者、社会学者などの文系の学者と、医者や自然科学者との複雑な組み合わせで議論が造られているのは評価できるが、やはりまだお互いに戸惑い気味で、相手の出方を探るというだけで終わっているものが相当多かった。期せずして、この4巻本は、黎明期の目的の高邁さと現実的困難をそのまま露わにしているといっている。

なお、初期には神学者たちが重要な役割を果たした。それは生命倫理学者の性急な「テクノクラート化」に抗する重要な因子だったが、その後医療経済的視点が徐々に優勢になっ

て行くに従い、神学者は周辺化されていくことになる。70年代なかば過ぎ頃までは、神学者の実質的貢献の後期の時期にあたるのである。

(2) もともと、アメリカは文化風土的に功利主義的でプラグマティックなところが多大にある。それが、医療経済的視点と結びつき、とりわけ80年代初頭頃から、生命倫理学でも急速に、治療と其对費用効果との関係が取り沙汰されるようになった。そのときに辣腕を発揮したのが当然ながら経済学者たちであり、それはその後の生命倫理学に陰に陽に通底的な影響を残すことになる。その事情が調査の過程で明確に確認できた。

(3) さて、先にも述べたように、その辺りの確認をしながらも、その後も生命倫理学史を内部完結的に行うことの意味が見出しにくくなっていった。そして、より哲学的含意を強くもつ、生命論的な概念の調査を開始した。その過程で出会ったのが、古代ギリシャに起源をもつというゾーエー(ζωή)とビオス(Bios)という二つの概念である。

それは、特に現代イタリアの思想家、ジョルジョ・アガンベン著作群を介して私の前に現れてきた。具体的にはアガンベンの『ホモ・サケル』などを中心とする著作群である。その概念対は具体的には、大枠で二通りの意味をもちうる。

まずその政治的解釈。その場合、ゾーエーは飲食、生殖、身体養生などの個人の個人的で生命保存的な生活の中で発現している生命の様式のことをさす。またビオスは公の政治、議論などの最中における生命様式のことを指す。

その生物学的解釈の場合には、ゾーエーは個性・個体に関わる特質を一切欠いた「単に生きている」という場面での生命になる。他方、ビオスとは国籍、性別、経歴など、その社会的履歴を抱え込んだそれぞれの個人のことを指す。

これらの概念対は、特に後者のような生物学的解釈を伴う場合、それが生命倫理的にも重大な含意をもつということが徐々に明らかになっていった。

例えば意識をもたないが、生命維持機能が生きている植物状態(遷延性意識障害)にある患者の場合には、ビオスは既に欠落しているが、ゾーエーがむしろむき出しになっている、という状態にあるといえる。アガンベン自身は植物状態と脳死とをあまり意識して区別していないという欠点はあるとはいえ、まさにこの主題は、アガンベンが『ホモ・サケル』の中で、現代のホモ・サケルの一具体例として挙げているものだった。現代の脳死患者はホモ・サケル、つまりゾーエーが露わになったむき出しの生なのだ。

ちなみに現代のホモ・サケルとして、彼が名

指すのは脳死患者以外にも、強制収容所に入れられていたユダヤ人たち、そこでの人体実験の被験者たちなどがいる。

そして、私はこれらの問題設定を背景に、もともとの生命倫理学的問題系と、より直結させる形で、ビオスのビオス性を主として論じた「装甲するビオス」、そして、植物状態の患者の処遇などを巡る際に利いてくるパーソン論の射程を論じた「人とヒト」を完成させた。この二つの論文は、今回の研究の、若干の方向修正はあったとはいえ、最も関与的で、最も先鋭的な問題群にまで到達しえたものだと考えている。

ちなみに前者の「装甲するビオス」は、その後若干の修正を経た上で、フランスの生命倫理関係の国際会議でも話した。主に哲学者と医学史家が聴衆として存在していたが、そこで私は2008年9月初旬に”*Autour de la question de Bios et de Zoe*”(ビオスとゾーエーの問いの周辺で)と題して話した。そこで、聴衆に一定の興味を引き起こすことができた、と自負している。

(4) こうして私は当初の「黎明期の生命倫理学」という、文化史的で歴史的な研究から、より哲学的・概念的な生命論探索と、その生命倫理学的射程の掘り下げ、という課題へとシフトした。とはいえ、そのシフトが無駄なものだったとは思わない。

それどころか、そのシフトによって、単に上記のビオス・ゾーエー概念対だけではなく、より広範な議論場へと自分を導くことができたからである。より具体的には、生命論が政治哲学的文脈の中で一定の役割を果たしうるということを自覚した、ということである。

それは、新たに私の意識の中で「生命倫理から、生・政治学へ」という主題設定の重点移動となって結晶していった。そして事実、2010年春から始まった新たな科研の4年計画では、この生・政治学をより直接的に対象とした研究を立ち上げたところなのである。その深化を目指して、今後の4年間、充分に精進する積もりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① Osamu Kanamori, SHIMOMURA Toratarô et sa vision de la machine, 査読有、Ebisu, automne 2010 掲載予定
- ② Osamu Kanamori, L'Evolution Créatrice et le Néo-Lamarckisme, 査読有、*Lire L'Evolution Créatrice*, P.U.F., 2010 掲載予定
- ③ 金森 修、〈認識の非自然性〉を頌えて、

- 知識 / 情報の哲学、招待論文、岩波書店、講座哲学第4巻、2008、pp.57-76.
- ④ 金森 修、エピステモロジー、招待論文、中央公論新社、哲学の歴史第11巻、2007、pp.531-564.
- ⑤ Osamu Kanamori, Bios and his Self-armor, 査読有、*Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, No.2, 2007, pp.26-43.
- ⑥ 金森 修、装甲するビオス、招待論文、岩波書店、石川准他編、身体をめぐるレッスン第3巻、2007、pp.3-26.
- ⑦ 金森 修、人とヒト：パーソン論の視座を通して、招待論文、岩波書店、野家啓一編、ヒトと人のあいだ、2007、pp. 105-122.
- ⑧ 金森 修、『創造的進化』と〈生命の形而上学〉、査読有、哲学と現代第23号、2007、pp.70-87.
- ⑨ 金森 修、遺伝子改造の倫理と教育思想、査読有、近代教育フォーラム第15号、2006、pp.49-59.

〔学会等発表〕(計10件)

- ① 金森 修、病と死の傍らの賢治、日台国際研究会議、東アジアの死生学へ、台湾国立政治大学、2009.10.30
- ② 金森 修、死の扉と、生の出口、シンポジウム死生学の可能性、東京大学文学部、2009.6.14
- ③ KANAMORI OSAMU、Autour de la question de Bios et de Zoe, Autour du corps humain, Centre Georges Canguilhem, 2008.9.5
- ④ KANAMORI OSAMU、Shimomura Toratarô et sa vision de la machine, Etre vers la vie, Cerisy-la-Salle, 2008.8.23~30
- ⑤ 金森 修、三木成夫の自然学と自然哲学、第17回三木成夫記念シンポジウム、順天堂大学、2008.7.23
- ⑥ 金森 修、虚構の『近代』、エスパス・イマージュ、日仏会館、2008.6.13
- ⑦ 金森 修、エンハンスメントの哲学、国際シンポジウム、人間改造のエシックス、京都大学、2008.1.14
- ⑧ KANAMORI OSAMU、Fixation de l'instantané et de la forme, 国際シンポジウム、生の哲学の今、法政大学、2007.10.17
- ⑨ 金森 修、『創造的進化』と生命の形而上学、名古屋哲学研究会、名古屋市立大学、2007.5.12
- ⑩ KANAMORI OSAMU、Evolution Créatrice et Métaphysique de la vie, Ateliers euro-japonais sur l'Evolution Créatrice, Université de Toulouse II Le Mirail, 2007.4.19

〔図書〕(計2件)

- ① 金森 修編、慶應義塾大学出版会、エピステモロジーの現在、2008、500.
- ② 金森 修、筑摩書房、病魔という悪の物語、2006、143.

〔産業財産権〕
○出願状況 (計0件)
該当せず
名称：

○取得状況 (計0件)
該当せず

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ
<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~waskana/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金森 修 (KANAMORI OSAMU)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90192541

(2) 研究分担者

単独研究のため、該当せず

(3) 連携研究者

単独研究のため、該当せず